ほぼ週刊コラム　Partnership論　その２００

**シリーズ：『米国Partnership税制勉強会』**

**第二十六回勉強会（通年内容は**[**年表rev.9**](http://llc.a.la9.jp/Papers/evolution%20history/evolution%20history%20of%20US%20partnership%20taxation%20rev9.ppt)**参照方）の準備**

**Aligning sovereign rights and obligations with individual rights and aspirations**

20160810 rev.1 齋藤旬

 **IR4（第四次産業革命）の和訳作業ファイルrev15を**[作業ファイル](http://llc.a.la9.jp/Papers/IR4/The%20Fourth%20Industrial%20Revolution%20by%20Klaus%20Schwab%20revX.docx)**に**アップしておいた。

**3.3.3 International Security　邦際社会の安全保障 71**

Connectivity, fragmentation and social unrest 72

conflicts（紛争、権利主張の食い違い）の本質的変化 74

今週はこれらを和訳した。

　**今週のpunch lineは73頁の：**

この様にdigital革命は、communicationに新境地を開き、物理的mobilityを補完し強化した”mobility”をもたらす。これは丁度、第四次産業革命がphysical, digital and biological worldsを融合して発揮する効果の一部とも言える。それは、時間と空間による制限を超越してmobilityを奨励する。従って将来、第四次産業革命の課題の一つが、このhuman mobilityをgovernanceすることに見出されるはずだ。即ち、主権者としてのrights and obligations（権利と自然法的義務）と、個人としてのrights and aspirations（権利と自己spirit希望）とをalign（一つの立場から整理）してhuman mobilityの持つbenefitを最大享受するとともに、national and human security（同邦人と人類全体の安全保障）をreconcile（譲歩調和）させて、この益々多様化する世の中に社会調和を維持する方法を見つけ出すことが大きな課題となる。

　･･･を選んだ。注目してもらいたいところに下線を付加した。

**下線部の原文は**aligning sovereign rights and obligations with individual rights and aspirationsだ。和訳に注意したところを述べる。まずsovereign、これは国家ではなくpopular sovereigntyを持ったthe people即ちempowered peopleを意味している。 従ってそれに続く「義務」を意味する英単語は、ここでは当然、duty（実定法的義務）ではなくobligation（自然法的義務）が使われる。それからaspiration、これは「大志」とか「大望」と和訳されるのが普通だが、ここでは語源（spirit）に忠実に「自己spirit希望」と和訳した。最後にalign、これはエンジニアにとっては機械組立調整（アライメント）として馴染みの言葉だが、語源的には「一つの列に配置する」あるいは「一つの立場から整理する」という意味を持つ。後者をここでは用いた。

**意味するところは深い**。一言で言えば、ともすれば二律背反になりがちな、solidarity（連帯原理）とsubsidiarity（補完性原理[[1]](#footnote-1)）、言い換えれば、the common good（共通善）とeach person’s dignity（各人の尊厳）とをalign（一つの立場から整理）するということ。[[2]](#footnote-2)

つまり、the peopleは、場合によっては国家（state）をoverruleすることも可能な主権者（sovereign）だという考え方が、背景にある。

**ダボス会議にはその会期中に付随して**[**the Open Forum Davos**](http://www.openforumdavos.ch/en/contact.html)**という会議が**、[スイス福音派教会連盟](http://www.kirchenbund.ch/en)と世界経済フォーラムの共催で、2003年から毎年開かれていることが分かった。ダボス会議自身は1971年から毎年開催されている。そこに福音派の人たちが加わったのは、おそらくPost Secularismの興隆がその背景にあると思う。

私はIR4『第四次産業革命』の和訳を進める中で、色々とダボス会議やWEF（世界経済フォーラム）に関する資料にも目を通す機会がある。そうした中で、最近のキリスト教思想の動きとこの『第四次産業革命』の思想との接点が分かってくるだろう。

明日から5日間お盆休み。今週は以上。来週も請うご期待。

1. 大きな組織は小さな組織（個人を含む）を補完するサブな存在だという、日本人には分かりにくい考え方。 [↑](#footnote-ref-1)
2. **なお余談だが**、古代ローマ時代から*Bonum Commune*（共通善）と*Dignitus*（尊厳）として知られたこれら概念をsolidarityとsubsidiarityという原理にまとめたのは、19世紀にドイツのマインツ司教を務めたケテラー（1811-1877）だそうだ。

関連書籍として、[『自由主義、社会主義、キリスト教』](https://www.amazon.co.jp/gp/product/4771017573/ref%3Doh_aui_detailpage_o09_s00?ie=UTF8&psc=1)2006/6、 W.E.フォン・ケテラー (著), 桜井 健吾 (翻訳)と、[*Wilhelm Ketteler and the Birth of Modern Catholic Social Thought. A Catholic Manifesto in Revolutionary 1848*](https://www.amazon.com/gp/product/3831608466/ref%3Doh_aui_detailpage_o00_s00?ie=UTF8&psc=1) 、Martin O'Malleyを購入した。来年4月に私の定年を迎えて以降、じっくり読むつもり。興味深いことが分かったら当Siteで取り上げる予定。 [↑](#footnote-ref-2)